

ほんとうの意味の「自立」、 そして「自分らしく生きる」こと

映画監督 まきつぼたつこ
槇坪多鶴子さん



「人権」の基本は、一人ひとりが個性や能力をいかしながら、正直に「自分らしく生きる」ことです。今回は、関節リウマチのため車いすでメガホンをとり、「いのち、愛、共生」をテーマに映画製作に取り組まれている映画監督の槇坪多鶴子さんにお話をお聴きました。

自分の居場所を求めて

私は広島で生まれ、原爆が落ちた時は5歳でした。やがて、終戦を迎え戦地から復員した父は、なぜか故郷の広島には帰ってこず、私は母と2人で父の故郷に身を寄せることになってしまいました。そのころの私は、子ども心に「しっかりしなくては。母に心配をかけてはいけない」と常に言い聞かせていました。母に甘えた記憶はありません。小学校時代は、体も健康で、勉強も、遊ぶことも好き。クラスのリーダー的存在で、「芯の強い、いい子」と友だちや先生から、慕われ、頼られる存在でした。

小学校4年生の時に、大阪にいた父のもとに移りましたが、一家団らの思い出はほとんどありません。父はお酒が入ると時々、家の中で暴れることもありましたが、両親が離婚したのは中学の時でしたが、世間体とか経済的理由から私が大学に入って家をでるまで、同居を続けたのです。

そんな家庭でしたから、とにかく家にいたくないわけです。クラブ活動が終わっても家に帰らず図書室に行き、そこが閉まる夜遅くまで学校にいました。

演劇とのかかわりは、小学生からで、演出から主演までやったこともあります。演劇のおもしろさに目覚めたのもそのころで、中学、高校とずっと演劇は続けていました。

ところが、学校にいる間は友達とかクラブとか、結構楽しいのですが、ひとりになると、どうしても家のこと親のことを考えて暗くなる。そういう時は、淀川の川べりをひたすら走っていました。そんなわけで、家には毎日くたくたになって帰ってきて、食べて、寝るだけの生活でしたね。

学校のない夏休みや冬休みには、広島の親戚の家を転々としました。それも長くいると迷惑だから、3~4日だけお世話になるというわけです。常に回りに配慮し気遣う、「大人のような子ども」だったように思います。今振り返ると、家庭に「居場所」がないぶん、どこかに自分の「居場所」を探していたのだと思います。

そして、当時はお医者さんが足りないということもあり、「人間にとって最も大切な「いのち」をあずかる医者になって多くの人のいのちを救いたい」と考えるようにもなりました。

小さいときから、家の外で友達や先生に喜ばれたり、頼りにされることが、私の「居場所」でしたから…「人の役にたち、感謝される医者」になることが、自分の「居場所」になると感じていたのかもしれない。

演劇仲間との結婚・別離 ~心も体もボロボロに~

医者になるために、高校卒業後、家を出てアルバイトをしながら勉強をしようと考えていたのですが、現実にはかなり無理だということがわかってきて、結局、医学部をあきらめました。

その時は、「いのちを救う医者」を目指していた私が「死」も考えたほど落ち込みました。でも、死ねなかった。なぜかという私たちは、戦後の混乱期に、とにかく生きることがすべてでしたから…自ら死を選ぶことは基本的に考えられない世代なんですね。

悩んだあげく、小学生から高校まで続けていた演劇に自分の行き場所を見つけ、急遽、演劇部のある東京の大学を受験、入学することができました。

大学1年の時に演劇仲間と結婚して、4年の時に出産しました。卒業後は夫の実家の家業を切り盛りする生活になりましたが、夫は演劇ばかりで家庭をかえりみない人でした。

夫の両親からは「いい嫁がきてくれた」と、ずいぶん気に入られました。小さい時から「人に嫌われない、いい子」でしたから「嫌われないように…」と寝る時間を削って、子育てに家業に必死に頑張る。そんな生き方が心と体のストレスになったのでしょうか、結局身体をこわし、家を飛び出す形で離婚、子どもとも離ればなれになってしまいました。

やっとわかった ほんとうの意味の「自立」

離婚後の身の振り方について、大学時代に親交のあったある俳優さんに相談したところ、「自立しなさい」と言われました。ところが、「自立」の意味がわからない。

「自分のことは自分でする」、あるいは「働いてお金をもらう」ということが社会的な自立ということはわかるわけです。

それまで、私は進路を決めるときも結婚のときも、親に相談せず自分で決めてきました。そのことの責任は負わなければならない、というぐらいのことはわかっていましたが、自分の生き方を振り返ってみて、はじめて、人との関りの中で支えあう「自立」もあるということに気づきました。

結婚生活の中で「嫌なこともイヤ」と言えずに病気になった私。夫との関係でも「人を好きになるのは、尽くすこと」だと思っていました。自分ひとりで、なんでも抱え込んで、自分を理解してもらうことも、相手を理解することもなく、ひたすら「いい子」を貫こうとしていたように思います。

そうではなくて、自分にできないことや悩みがあれば、助けを求めたり、相談できる「人間関係」があってこそ「自立」していける。その一番身近にあるのが親であり、夫、家族で…必要なときに支えあえる関係が大切なのです。

離婚、子どもとの別れを経験したことで、「愛」というのは「お互いを理解しあう」ということから始まり、「育てあい、共に生きる(共生)」こと、そして…その延長線上に本当の意味での、人としての「自立」があるということが、やっとわかってきたわけです。

伝えたい「命の重さ」

その後、ある映画社で映画のさまざまな記録を担当するスクリプターとして18年の間、差別や偏見の問題、老人問題、思春期やいじめの問題など、いろんなテーマにかかわりました。そしてしだいに「差別してはいけない」、「いじめてはいけない」ということを、心からわかってもらうためにはどうすればいいのか、ということを考えるようになりました。

そんな時、アイドルといわれた少女歌手の飛び降り自殺があり、その後連鎖的に数人の少女が自殺をする事件やいじめが原因の自殺が全国で相次いで起こりました。

自分のことを考えても、10代のころは、冷静に大人の行動を見ている反面、デリケートな傷つきやすい心を抱えている、そんな感性の豊かな時期だったと思うのです。そんな子どもたちが、いとも簡単に生きることをやめてしまう。若い頃自殺を考えた私にとって胸の痛む事件が続きました。

その頃、再婚して、小学生の息子がいたこともあって、こういう時こそ、子どもたちに「いのちの重さ」を伝えたい、伝えなければならない、と強く思いました。

その思いの第一歩として、1985年に映画の企画制作会社を設立しました。翌年から93年までの間に～いのちと愛のメッセージ～「子どもたちへ」「若人よ」「地球っ子」という3作を、98年には、HIV・援助交際・薬物問題を盛り

込んだ「わたしがSuKi」を製作・監督しました。

例えば、映画の中には出産シーンがあります。それは、みんな自分の意志で生まれてくるんだということを知ってもらうためです。子どもたちにとって生まれる側で映画を見ることで、「自分のいのちを大切にしよう」と思うと同時に、「自分以外の人も同じように生まれてきたんだ」と気づくことで「他人のいのち」も大事にするようになると思うのです。

「いのちの誕生」を伝える「性教育」は「いのちを見つめる教育・共に生きることの大切さを伝える教育」であり、それは人権教育にもつながると考えています。子どもたちには、性を正しく見つめ、いのちの大切さを知り、自分を好きになってほしいと願っています。



映画「母のいる場所」の場面

介護する人、される人～それぞれの自立～

この数年は、家族と介護の問題やお年寄りの自立のありよう、成長を描いた「老親 ろうしん」(用語解説参照)「母のいる場所」(用語解説参照)を製作しました。

この二つの作品はどちらも原作者の実体験がもとになっているのですが、私自身も関節リウマチで車椅子の生活ながら、介護が必要な痴呆症の母と暮らしています。その母が、映画の撮影の時には私の車椅子を押してくれています。母は、一方的に介護される側になるのではなく、娘を手助けしていることで輝いているようです。そういう実体験からも「介護の原点は対等な人間関係のふれあいにあるのでは…」と思っています。

介護する人、される人がかかわりあいながら、それぞれが自立して自分らしく生きていける。幸せだなんて思える。そういうことが大事だと実感しています。

介護と子育てはどこか似ています。自分に余裕がないと、自分が幸せじゃないと、より弱い立場の方にはけ口を求めがちになり、虐待などを引き起こすのではないのでしょうか。介護も子育ても自分だけで頑張らないで、できないことは家族だけでなく、公的支援などにもSOSを送ることも必要です。

介護(子育て)する人、介護(子育て)される人の人権を保障し、その人らしく生きるために何が大切なのか?映画を見た人が介護を自分たちの問題としてとらえ、生き方、老い方について話し合っていたらキッカケになればと思っています。